
SMの主張

名野創平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SMの主張

【コード】

N0683J

【作者名】

名野創平

【あらすじ】

鞭も蠟燭も女王様も出てきません。タイトル詐欺です、すみません。(短編集)

1 給湯室にて（前編）

シンクの上のコーヒーメーカーがコポコポと音をたて、ガラスのサーバーに琥珀色の液体が満ちてゆく。深炒り豆の芳ばしい香りを含んだ蒸気に優しく鼻先を撫でられると、残業続きでくさくさしていた気持ちもゆるりとほぐれだす。

私は深呼吸をして心の換気をする。胸に溜まった苛立ちや疲労感をコーヒーの芳香で追い払う。

「うーん、いい香り。佐藤さん僕にもコーヒーお願い」

長時間のデスクワークですっかり強張った肩をぐるぐると回し、鈍痛のする眉間を揉みほぐしていると背後からバリトンの声が響いた。振り返ると、給湯室の入り口には同期の森の姿。

「砂糖いっぱい入れてうんと甘くしてくれると嬉しいな。あ、あと佐藤さんの愛情もたっぷり入ってるとなお嬉しいな」

そう言うと、森は元来柔和な目元をさらに緩ませたが、すぐに照れ臭くなったのか、なんちゃって、と軽くおどけて見せた。その態度がなぜだか無性に癪しゃくに障った。

「はあ？ これ別にあんたに飲ませるために淹いれてるわけじゃないんだけど。コーヒーが飲みたければ自分で淹れて勝手に飲めば。それともなに、あんた私のこと召使いかなにかと勘違いしてる？ やれコーヒー淹れるだけの砂糖入れるだけの偉そうに指図しちゃってさ。はっ、愛情たっぷり入れてってなにそれ、セクハラ？ そういうのはメイド喫茶でやりなさいよ、気持ち悪い」

反射的にまくしたてた私は〇、五秒後、我に返り、全身の血液がスコールのように激しく音をたてて下降するのを聞いた。

森は、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をして固まっている。無理もない。社内ではシャイで無口で大人しい人、という立ち位置を確立している女に突然、口汚く罵られたのだから。

私はそこらじゅうの壁に頭を打ち付けたい衝動に駆られながらも、

この失態を払拭すべく脳をフル回転させた。まずは平常心。敵に動揺をさとられるな。そして早急に打開策を見いだすのだ。

一度口から出た言葉は元には戻せない。ならば森の頭を殴って記憶を消去するか。いや、素人には力加減が難しい。いやいや、それ以前にどう考えても非現実的だろう、漫画じゃあるまいし。

やはり現実的に考えれば口封じ以外ありえまい。では奴の口を封じるにはどうしたらよいか。泣き落としはどうだ、涙は女の武器だというし。いや、私の涙にそれほどの効果は期待できそうもない。女の武器繋がりで色仕掛けというのもあるが、これもフェロモン不足で厳しい。他にあるとすれば懐柔策だが、いかんせん餌になるものがない。

考える、考える、死ぬ気で考える。知恵を振り絞れ。当面の危機を回避できなければ、今後、社内での私の立場は危うくなる。

「あ……あの、なんだか色々とすみませんでした。僕も疲れが溜まっておかしくなつてたみたいで……」

森が申し訳なさそうに頭を下げた。

どうやら敵は己の発言に後ろめたさを感じているようだ。これは好機。人の弱みに付け込むのはいささか気が咎めるが、今は綺麗事をいつていられる状況ではない。

「ううん、こつちこそごめんね。私も森君も疲れでおかしくなつたのかもね。お互い今の失言は忘れよう」

お互い、という単語をことさら強調し、双方に非があるのだから口外するなど暗にほのめかす。濃厚で真面目な好青年と社内での評判もすこぶる良い森のこと、これで他人の失態を吹聴して回るようなまねはしないだろう。

ひとまず安堵の胸をなでおろしていると、森が耳を疑うようなことを言いだした。

「でもよかった。安心したよ、佐藤さんの毒舌が健在で」

「え？」

「四年ぶりに再会したら佐藤さんずいぶん変わってたから驚いた。

昔はあんなに口が悪かったのに今じゃすっかり、シャイで無口で大人しい人、だからさ」

この男はなにを言っているのだろう。意味がわからない。

「再会つて、誰と誰が？」

「誰つて、僕と佐藤さんが。僕たち同じ高校に通ってたじゃないか。ああ、やっぱり佐藤さん僕のことなんてもうとっくの昔に忘れてしまったんだね。入社式で顔を合わせた時に、初めまして、って挨拶されたから嫌な予感はしてたけど、それでもやっぱり本人の口からはつきり聞かされるとショックだな」

森は芝居がかった仕草で天を仰ぐと小さく溜息を吐いた。

「まあ、佐藤さん遠くの大学に進学したし、成人式にも同窓会にも顔を出さないから無理もないか。でも」

足下がぐらりと揺れた。まるで床が液化化し、不規則にうねっているようだ。森の声が遠くなる。

私は高校生のころ男子生徒達から、大人しそうな顔して口が悪いと言われていた。具体的になにを指して大人しそうな顔と言っていたのかは知らないが、口の悪さは自覚していた。そしてそれが私にとって悩みの種だった。

自分がされて嫌なことは相手にしてはいけない、そんなこと幼稚園児でも知っている。そんな常識を持ち出さずとも、他人に罵詈雑言を浴びせるのが卑劣な行為であることは百も承知だ。私だってわかっている。わかっているからこそ、その忌むべき行いを繰り返す自分に腹が立った。

けれども、悪態を吐くたびに自責の念に駆られ、次こそは汚い言葉を口にしないと心に誓うのに、どうしても男子生徒に話しかかれると噛みついてしまう。もはや条件反射といってもいい。自分でもなぜだかわからないが、あのへらへらとしたにやけ面を見ると、苛立ちとも怒りともつかぬ感情が一瞬で沸点に達するのだ。そう、まるで瞬間湯沸かし器のように。そうなるともう自分自身の感情を制御することができない。

自責と自己嫌悪の日々。このままでは駄目だ。

私はこの悪循環を断ち切るべく一念発起した。故郷を遠く離れ同窓生のいない大学へ進学、就職した。この決断は功を奏した。

私の暴言が相手との会話量に比例していることは、すでにそれまでの人生で学習済みだった。多くの言葉を交わし気心が知れてくると、つい遠慮がなくなりぞんざいな態度をとってしまうのだろう。

それは裏を返せば、さほど親しくない相手に対しては暴言癖が発動しないということだ。現に見知らぬ人ばかりの新天地ではしばらくの間、暴言癖は鳴りを潜めていた。

私は慎重に、相手と良好な関係を保てる距離を模索した。幾度となくぼろを出しそうになりながらも、大学生活の四年をかけて自己改革を行った。そして晴れて社会人となり、この八ヶ月順調だった。自己嫌悪に苛まれることも少なくなった。

それなのに、それなのに。
私ドSなの。そんな台詞が通用するのは合コンではしゃぐ男女が二次元くらいのもの。実社会、こと職場においては容認されない振る舞いだ。にもかかわらず疲れが溜まった程度で馬脚を現すとはなんとという体たらく、たった二週間やそこから残業が続いただけではないか。

自分の脆弱さが恨めしい。不甲斐なさが腹立たしい。

「泣いてるの？」

靴の爪先を睨んで歯噛みする私の、驚くほど間近で声がした。顔を上げると微笑む森の姿。

「なに言ってるの、泣いてなんかいいわよ。あんたの目、腐ってるんじゃない？ 眼科行けば」

動転して咄嗟に口をついて出たのはやはり、他人を傷付ける酷い言葉。もう嫌だ。また同じ過ちを繰り返すのか。せつかくここまで上手くやってこられたのに。自分なりに精一杯頑張ってきたのに。

落胆から、私はふたたび俯く。目を伏せる瞬間、森のスーツの胸元から覗くネクタイが視界に入った。深い群青色のスーツに映える

真紅のネクタイ。その色は私の目に、ひどく禍々しいものとして映った。

1 給湯室にて（後編）

「なあ、森。おまえチヨコいくつ貰った？」

北風吹きすさぶ校舎裏。焼却炉へ向かう道すがら隣を歩く友人が訊ねる。僕は無言で首を振った。

「俺も。義理チヨコすら貰えねえ。あ、佐藤」

そう不満げに口を尖らせた友人は、裏庭に見知った顔を見付けると進路を右に変えた。二人で一つのゴミ箱を運んでいたために、僕は自然と引きずられる格好になる。

「佐藤、チヨコくれよ。今日バレンタインだろ」

友人の声に、黙々と落ち葉を掃き集めていた女子生徒が顔を上げた。おかつぱの黒髪に縁どられた小作りな目鼻立ち。伏し目がちな表情と控えめな所作はまさに大人しいという形容がぴったりだ。

友人の不躰な要求に面食らったのか、佐藤の手がぴたりと止まった。わずかに見開いた目が困惑気味に数度またたく。いかにも奥手そうな彼女にとって、傍観者のいる中でこの催促はたまらないだろう。見ているこちらも居たたまれない気分になる。

そうして僕の心に同情の念が起こった刹那、

「はあ？　なんで私が。チヨコが欲しければ進駐軍の所へでも行けば」

佐藤が低く冷淡な口調で吐き捨てた。なだらかな曲線を描く凹凸の少ない眉間には深い皺が刻まれている。

僕は度肝を抜かれ、思わずその顔を凝視した。

佐藤とは高校入学以来一度も同じクラスになったことはなかったが顔と名前は知っていた。これまで小動物のような雰囲気から内向的で大人しい人物を想像していたのだが、この瞬間、彼女に対する認識が一変した。人は外見では判断できないというが、それをこうも見事に体現しているのも珍しい。

「進駐軍って……、なにが悲しくてムキムキマツチヨな軍人さんに

チヨコおねだりしなくちゃならないんだよ。バレンタインなんだから女子から貰わなきゃ意味ないだろ。なあ、チヨコくれよ」

佐藤の外見と言動のギャップに愕然としている僕とは対照的に、要求を一蹴された友人は平然としていた。驚くでも気分を害するでもなく、むしろ嬉々として会話を続けている。

「はっ、あなたにやるくらいならドブに捨てたほうがまし」

佐藤が鼻で笑う。彼女のつんけんした態度が羞恥心からくるものでないことは、その疎ましそうに細められた双眸から窺い知れた。邪険にされてもなお、にやにやと笑いながらからんでくる男を心底鬱陶しく思っているのだろう。

そんな彼等のやりとりを目の当たりに、僕は言い知れぬ激情に駆られていた。

佐藤が眉根を寄せ毒づくたびに、尾てい骨から脳天へと痺れが走った。まるで電気を流されているような痛痒さが背骨を刺激する。だがそれは苦痛でも不快でもない、甘い疼き。下半身に生まれた熱が背筋を這い登ってくる感触に、僕は自分の両腕を強くかき抱き、激しく身震いしたくなった。

この日から僕の秘め事は始まった。

二人が一緒にいる場面に遭遇すると何食わぬ顔で近付いて輪に加わった。とはいっても佐藤と直接言葉を交わすことはしない。ただ、友人に罵詈雑言を浴びせる彼女の冷ややかな声を鼓膜に記憶させ、不愉快そうに顰められた顔を網膜に焼き付けた。

誰にもさとられぬよう平静を装いながら、独り脳内で快楽に酔いしれる。正直、自分でも悪趣味だと思う。この行為が露顕すれば顰蹙しんしゅくを買うのは間違いない。

だが、ばれないようにと細心の注意を払う一方で、秘密が暴かれて佐藤に蔑やまれたらという甘美な誘惑が頭をもたげることもあった。僕の疚やましい気持ちを知ったら彼女はどんな顔をするだろう。軽蔑して、汚物を見るような目で僕を見たりするのだろうか。妄想するだけで身悶えしてしまう。

しかし幸か不幸か僕の秘め事が発覚することはなかった。佐藤は僕など眼中にないようで、僕に一瞥を与えることすらなかったからだ。

結局、僕の秘め事は卒業の時を迎えるまで続き、なんら形を成さぬまま幕を閉じた。

それから四年と八ヶ月の月日が流れ、佐藤はあの日と変わらぬ冷淡な口調で、

「 そういうのはメイド喫茶でやりなさいよ、気持ち悪い」

そう吐き捨てた。過去には一度として向けられたことのない侮蔑の眼差しが僕を射る。

つつ、と脊椎を直に撫で上げられるような感触に全身の毛が逆立った。思春期の一過性だと結論付けて封印した感情が蘇る。

僕は給湯室に足を踏み入れた。佐藤との距離は三步半。

学生時代の話題を振ると佐藤は目に見えて動揺した。彼女の変貌ぶりから察するに、あの頃は彼女にとって人生の汚点なのだろう。触れて欲しくないことくらい顔色を見ればわかる。

だが僕は喋り続けた。苦々しげに顔を歪める様子がたまらなかったから。

「 ああ、やっぱり佐藤さん僕のことなんてもうとっくの昔に忘れてしまったんだね」

佐藤は僕のことを忘れたわけではない、端から僕という存在を認識していなかったにすぎない。そんなこと学生時代から知っていた。それでも僕は、さも彼女が薄情であるかのように恨みがましい物言いをした。

別に本気で彼女を責めるつもりなどさらさらなかった。ただこう言えば彼女が困るだろうと踏んだからだ。案の定、彼女は渋面を作り視線を逸らした。

佐藤の眉間の皺が増すたびに僕の神経は昂った。僕の言葉によって彼女の心が揺さぶられているのだと想像すると胸がきゅう、と締め付けられた。もっと間近で彼女を感じたい。逸らされた瞳を正面

から覗き込み、白い肌に刻まれた深い皺に指を這わせられるくらい近くで。

もつと、もつと。

僕は押さえがたい衝動に突き動かされ、一步また一步と歩を進めた。まるで小動物を追い詰める獰猛な肉食動物になった気分で、ふつと笑みが漏れた。

俯いた佐藤の華奢な肩がかすかに震えている。

「泣いてるの？」

問いかけた僕の声に佐藤が弾かれたように顔を上げた。ねめつける双眸の下のふつくらとした頬に赤みがさす。

「なに言ってるの、泣いてなんかないわよ。あんたの目、腐ってるんじゃない？眼科行けば」

反抗的な態度。嫌悪感を剥き出しにした表情。ああ、ゾクゾクする。

僕のすべてを拒絶するようにつたたび面を伏せた佐藤の黒髪が流れ、隠れていた両耳が露わになった。小さな耳は真紅に染まっている。

それを目にしたとたん僕は無性に、その熱を帯びた薄い耳の縁にむしゃぶりつき、彼女が泣いて嫌がる姿を見たくてしかたがなくなつた。

2 離れて(前編)

「もつときつく縛って」

もどかしげにそう言つと、美紗みさは小夜子さよこの拳こぶしに自身の左手を重ねた。柔らかな指の腹が、催促するように輪郭を撫でる。

畳にぺたりと腰を下ろし、向かい合つた格好で、小夜子は美紗の差し出した右腕を着物の腰紐で緊縛した。衣擦れの音が、障子を閉め切つた六畳間の、ひやりとした空気を震わせる。

「……もつと、ぎゅつしてよ」

乞われるがまま腰紐を左右に引き締めると、美紗がもぞもぞと脚を動かした。互いの膝が触れ、小夜子が視線を上げると至近距離に美紗の細面があつた。

その頬は上気し、細められた切れ長の瞳はしつとりと潤んでいた。薄く開いた唇から荒い息遣いが漏れ聞こえてくる。断続的な呼吸に合わせ、犬歯の目立つ前歯の奥で、赤い舌が妖しく蠢く蠢くのが見えた。小夜子は目のやり場に困り、そそくさと視線を戻した。

美紗の腕は掌を上向けた状態で真つ直ぐ前に伸ばされている。すらりとした前腕には薄紅色のモスリンが巻かれていた。滑りにくく締めやすい特性を持つモスリンは、際限なく肉に食い込み、皮膚を歪に引きつらせた。絞つた雑巾のように掬よじれ、無数に皺の寄つた肌が痛々しくて、小夜子は思わず手を緩めた。

「誰がやめていいなんて言つた？」

先程までの、熱に浮かされたような上擦つた声とは一変、怒気を含んだ冷たい声が耳に刺さる。小夜子は色を失い、

「うめ……っ」

謝罪の言葉を口にしたが、しかしそれは突如もたらされた痛みによつて、無残に途切れた。

美紗が小夜子の手の甲に爪を立て、手首から指の付け根までじりじりと引つ掻いてゆく。長めに切り揃えられた形の良い爪が表皮を

えぐり、角質が削り取られる激痛に、小夜子は小さく悲鳴を上げた。「あんたが悪いのよ、あたしの言うとおりにしないから」

苦痛に耐える小夜子の耳元に、美紗が唇を寄せて囁く。熱い息が耳朶じだにかかり、小夜子は首をすくめた。その拍子に目頭から涙が一粒、畳の上に零れた。

「そんなに痛かった？」

美紗がくすくすと笑いながら、い草に落ちた涙の粒を指で拭い、小夜子の手の甲になすり付ける。湿った指先で、皮が捲れて血の滲む傷口をなぶられ、小夜子は息を詰まらせた。

「……ほら、早く続けなさいよ」

なおも執拗に蚯蚓腫れみみずはを弄りながら、美紗が命じた。ぴりぴりと焼け付くような痛みに苦悶しつつ、小夜子は美紗の腕を力の限り締め上げた。

美紗の人差し指が、びくん、と跳ねる。弾力のある肉越しに硬い骨の感触。血流を遮断された前腕は末端まで赤黒く変色し、幾筋もの太い血管が露わになる。それは脂肪の少ない手首に顕著で、青や紫に浮き出た血管のいたる所に、行き場を失くした血液がぼこぼここぶと瘤を作っていた。

どのくらいの時間そうしていただろうか。やがて、椿の花がぼとりと落ちるように、美紗の手が力なく、小夜子の太腿の上に落ちてきた。

放して、と切れ切れに呻く声で腰紐を解いた。紅潮し小刻みに震える掌からすうつと赤みが引いてゆく。美紗は下唇を噛んできつく目を瞑ると、ぶるりと大きく身震いした。

閉ざされた座敷は、奥深い森に水を湛たたえた沼に似ている。薄暗く饅すえた臭いのこもる室内は、まるで透明度の低い水中のようで、ほの明るい障子に黒く浮かぶ格子模様は、陽光を遮る水草を連想させた。

閉塞的な空間で繰り返される秘め事。美紗と膝を突き合わせていると、小夜子はいつも、沼底の厚く堆積したヘドロの中にずぶずぶ

と沈み込んでゆくような錯覚に襲われた。そうして、目も鼻も口も全身の毛穴一つ一つにいたるまでもが汚泥に侵食され、窒息してしまいそうな息苦しさをぼえた。

美紗に緊縛を命じられるたび、小夜子は鬱屈した感情を抱く。けれど美紗は小夜子にとつてただ一人の友達。逆らうことなどできなかった。

小夜子が季節外れの転入でなかなか学校に馴染めなかったころ、気さくに声をかけてくれたのが美紗だった。慣れない土地で心細い時、傍らにいてくれたのも彼女だ。だから小夜子は、美紗の要求に唯々諾々と従った。拒絶して落胆させたくなかった。なにより小夜子自身、見捨てられるのが怖かった。

ゆるゆると美紗の目が開く。小夜子は身動きひとつせず、従順な飼い犬さながら次の指示を待った。

「ねえ、小夜子のこと縛ってもいい？」

小夜子の瞳を覗き込まるとばかりに、美紗が身を乗り出した。美紗の手が伸びて小夜子の手首を掴む。突然のことに喫驚し、小夜子は咄嗟にそれを払いのけた。

「なにするのよ、痛いじゃない」

美紗が柳眉を逆立てる。

「う……ごめんなさい」

「あんだ、あたしに逆らうつもり？」

「違うの、そんなつもりじゃ……ただ、びっくりして……」

美紗の剣幕に小夜子はたじろいだ。

「あーあ、なんか白けるわあ。こんなのただのおふざけじゃない。あんだって、ほんとノリが悪いわよね。つまんないの」

「ごめんなさい」

「べつに謝らなくてもいいわよ。もう、あんだとは遊ばないから突き放すように言って、美紗がツンとそっぽを向く。小夜子はその膝にすがり付いた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、許して美紗ちゃん」

「うるさいわね、あたしに触らないでよ！」

物凄い形相で怒鳴りながら美紗が小夜子を突き飛ばした。肩口を強く押され、小夜子は後方に体勢を崩した。仰向けに倒れる寸前で畳に肘をつき、片肘立ちのまま、愕然と目を見張る。その有様を冷やかに眺めると、美紗は小夜子をおいて部屋から出て行った。

帰宅した小夜子は自室に閉じこもり、声を殺して泣いた。心配した様子を見にきた母親を門前払いし、暗い部屋でただただ咽び泣いた。

深夜、激しい頭痛に耐え切れず洗面所へ向かった。泣き腫らした臉は重く、洗面台の照明が目には沁みた。乱れて頬に貼り付いた髪、充血した白目、真っ赤な鼻の頭。鏡に映った不細工な自分と対峙していると頭痛が増す気がして、冷たい水でばしゃばしゃと顔を洗った。

壁のタオルに手を伸ばし、指が触れた瞬間、動きが止まった。顔から滴り落ちる水が胸元を濡らすのも構わず、花柄のタオルを凝視する。指先に触れる生地は厚手でごわごわしていて、美紗の腕を縛った腰紐とは明らかに別物の感触だった。モスリンはもっと、薄手で柔らかく、さらりとしている。

それなのになぜ、離れでの一件が思い出されるのだろう。美紗の赤い舌が脳裏をよぎり、手の傷が疼いた。

しばし逡巡した末、小夜子はタオルを掴むと左前腕に巻き付けた。自分で自分の腕を縛るのは困難を伴ったが、何度か繰り返しているうちに、ぐつときつく締まった。

なぜ美紗は腕を縛るのだろう。なぜそれを自分にさせるのだろう。小夜子には、美紗の胸中も思惑も察することができない。

タオルの片端を左手で固定し、もう一方を右手で引くと、ギチギチとパイル地の擦れる音が洗面所に響いた。皮膚が、肉が、生地に巻き込まれて痛んだ。

ただただ痛みしか生まない行為。それなのになぜ美紗はあんな表

情を見せるのだろう。上気した頬、潤んだ瞳。小夜子は瞼を閉じた。圧迫された血管がどくどくと脈打つ。普段は気にも留めない血管の位置が手に取るようにわかる。押し潰された管の中で血液が逆流するのがわかる。左腕に意識が集中する。頭の中が赤い液体で満たされてゆく。なにも考えられなくなる。もう、なにも……。

はっと我に返り、小夜子は慌ててタオルを解いた。塞き止められていた血液が一気に流れ出す。動脈に、静脈に、毛細血管に、熱い血液が巡る。縛られていた箇所から指先へと痺れが走ったのも束の間、前腕がすつつと軽くなった。浮遊感と同時に、脳内で白い火花が散り、小夜子の薄く開いた唇から熱い息が漏れた。

心臓が早鐘を打つ。脳髄を突き上げるような得体の知れない衝撃に、小夜子は空恐ろしくなり、タオルを脱衣所の洗濯機にほうり込むと急いで蓋を閉めた。

翌朝、いつも待ち合わせしているバス停に美紗は現れなかった。五分、十分と時間だけが無為に過ぎ去り、二十分待ったところで諦めて独り登校した。

休み明けの中学校は活気に満ちている。生徒達はさんざめき、廊下や教室のそここで四方山話よもやまばなしに花を咲かせたり、ふざけ合ったりしている。教壇の傍にたむろする一群の中に美紗の姿もあった。彼女は輪の中心で屈託なく笑っていた。

小夜子が教室に入ると、美紗の隣で手を叩いて笑い転げていた女子生徒が横目を使った。つられて他の生徒達もちらちらと窺うような視線を投げかける。場に緊張が走った。

集団の意識が小夜子に注がれる中、しかし、美紗だけは張り詰めた空気など意に介さず喋り続けていた。常に小夜子を見詰めていた切れ長の瞳は今、正面に立っているおさげ髪の女子生徒に向けられている。その空々しい態度に、かたくななまでにこちらを見ようとしない瞳に、胸が潰れそうになる。

小夜子は居たたまれなくなつて足早に自分の席へと向かった。着

席して机の上にノートを広げると、絡み付く視線から逃れるように頭を垂れた。罫線の上にちまちまと並ぶ文字に全神経を集中して外界を遮断する。

けれども、意識しないようにと思えば思うほど、感覚が研ぎ澄まされてゆく。喧騒の中であって美紗の声だけが、いやにはつきりと聞こえてくる。

まるで昨日のことが嘘みたいに楽しげな会話。本当は、すべて自分の被害妄想なのではないかと思えてくる。実際には美紗との間にはなにもなかったのではないか。そもそも、美紗と友達だったという事実すらないのではないか。互いの家を行き来する仲というのも自分の願望なのではないか。現実には、新しい学校に馴染めず、転入してからずっと独りぼっちだったのではないか。クラスで浮いた存在だから皆、遠巻きにしているのではないか。

美紗の笑い声が鼓膜を震わせるたび、小夜子の脳内で負の連鎖が起こった。頭の中に濁った色のペンキをぶちまけられているような気分になる。どンドンどンドン、どす黒く粘り気のある液体で思考が塗り潰される。

耳を塞いで机に突っ伏してしまいたかった。目頭が熱くなって視界が滲む。鼻の奥がツンとして、堪えていたはずの涙が零れた。

小夜子は誰にも気付かれないうちにそっと、ノートに落ちた涙を拭いた。その手の甲に美紗のつけた爪痕を見付け、昨日の出来事が紛れもない事実なのだと再認識させられる。小夜子はたまらず、ぎゅっと目を瞑った。

下校時刻になると、小夜子は真っ先に正門を抜けた。俯き加減で家路を急ぎ、もつれる手で玄関の鍵を開ける。そうして自室に駆け込むと、ベッドに顔をうずめ、堰を切ったように号泣した。しゃくり上げる自分の声が呼び水となって、とめどもなく涙が溢れる。

シーツに額を擦り付けた時、頬に冷たいものが触れた。手を伸ばして目の前に引っ張り出して見ると、それはセーラー服のスカート

だった。ポリエステル生地は皺くちやになり、涙に濡れていた。

小夜子は制服の襟元からスカーフを抜き取ると、左前腕に巻き付けた。片方の布端を膝で押さえて固定し、もう片方を力一杯引っ張る。

もう嫌だ。もう、なにも考えたくない。

ぎりぎりと腕が締め付けられる。意識が腕に集中する。赤い液体が脳内を満たし、思考が麻痺する。

これでいい。これでもう、なにも考えずにすむ。

2 離れにて（後編）

日曜日の午後、小夜子が家を訪ねて来た。母親に促されて玄関へ行くと、彼女は半開きの引き戸の脇に立ち、思い詰めた表情で上がり框がまちの辺りを凝視していた。

「あ、美紗ちゃん……」

美紗の気配に視線を上げると、小夜子は緊張した面持ちで微笑んだ。しかしそれは笑顔と呼ぶにはあまりに不自然で、ぎこちなく上げた口角が引きつるのを気にしてか、彼女はすぐにまた俯き加減になった。

美紗は無言のまま、たたきに下りて突っ掛けを履き、表へ出た。

庭を右手に折れ、納屋の脇を通って母家裏の離れに向かう。振り返らなくても、後方から聞こえる遠慮がちに砂利を踏む音で、少し遅れて小夜子がついて来るのがわかった。

離れでの一件以来、小夜子とはもう一週間、口をきいていない。

小夜子は見捨てられることを極端に恐れる性質たちだから、すぐにでも泣いて許しを請いにくるだろうと高をくくっていたのだが、予想に反して美紗と距離を置くようになった。

手の甲に爪を立てたせい、縛らせてと迫ったせい、理不尽な理由で怒鳴りつけたせい、またはそれらすべてか。原因は特定できないが、小夜子が美紗を恐れていることだけは明白だった。小夜子は、美紗が側を通るだけで身を硬くし、誰かが美紗を呼ぶ声にすら、びくりと肩を震わせていた。

その怯えようが美紗の加虐心を煽った。

なにも美紗は、小夜子のが嫌いだとか、憎いだとか思っているわけではない。むしろ好きだ。好きだからこそ自分の手で、彼女の繊細な心を掻き乱し、寂しげな面立ちを歪ませ、愁いを帯びた瞳を涙で濡らしたかった。

この感情が一体どういうものなのか、なにに起因しているのか、

正直、美紗自身にもよくわからなかった。ただ、小夜子を一目見た瞬間、美紗の中になにやら後ろ暗い感情が頭をもたげたことだけは鮮明に記憶している。

小夜子は親の都合で、生まれ育った都会から、知人もいないこの片田舎に越して来た。転校初日、教師に連れられ教壇に立った彼女は、美紗がこれまでに出会ったどの少女とも違っていた。

美紗の知る少女達は程度の差こそあれ皆、天真爛漫で健康的であったが、小夜子はどこか陰気で不健康な印象を与える少女だった。慣れない環境で不安なせいもあるのだろうが、それを差し引いてもなお、そこはかとなく漂う陰性な雰囲気は拭い去ることができなかった。

それでも小夜子は衆人環視の中、懸命に笑顔を作って自己紹介をしていた。その、無理に笑みの形にした小振りな唇を見ていたら、美紗は無性に残忍な気持ちになった。蜘蛛が獲物を糸で絡めて捕食するように、彼女をじわりじわりと籠絡し、退路を断って、思う存分苛めてみたい。そんな邪な願望が腹の底から湧き上がってしかたがなかった。

母家の裏手に位置する離れは、正面を除く三方をぐるりと藪椿に囲まれ、常に日当たりが悪かった。以前は祖母が寝起きしていたのだが、その祖母が他界して以来、物置代わりとなっている。

人が住まなくなった家は、まめに換気をしていてもやはり空気が澱む。玄関を開けると、室内に停滞していた空気が出口を求めて流れ出てきた。長年にわたり焚き染められた線香の匂い、湿気と黴の臭い、埃の臭い。生活臭とは異なる、主不在の建物特有の臭気が鼻を突く。

小夜子を伴っていつものように一番奥まった和室に入ると、美紗は部屋中の障子を閉め回した。黄ばんだ障子紙に遮られ、室内はいっそう採光が乏しくなる。ほの暗い座敷に、障子が敷居を滑る、堅く乾いた音だけが響く。

「で、なんの用？」

ぱしん、と一際大きな音を立てて最後の一枚を閉めると、美紗は小夜子に向き直った。

小夜子は物音に驚いたふうにも目を睜みはり、部屋の隅に縮こまっていた。視線が合うとなにか言おうと口を開き、けれどすぐには言葉が出ないようで、喘ぐように口をぱくぱくさせた。

美紗が無表情に見据えると、小夜子は苦しげに声を絞り出す。

「この間はごめんなさい。突然だったから、その……驚いて。でも、もう大丈夫だから……」

尻すぼまりに小さくなる声。語尾はかすれて消えた。

「大丈夫って、なにが？」

美紗は訝しげに目を細めた。小夜子は言いにくそうに口籠もりながら、

「わたしのこと……縛っていいよ」

「はっ、あんたなに言ってるの」

突拍子もない申し出に、美紗は鼻で笑った。

相当な覚悟で発したであろう言葉を一笑に付され、小夜子は一瞬傷付いた顔をした。けれど美紗との仲違なかつがいがよほど応えているらしく、今までほとんど自己主張することのなかった彼女が、今回は珍しく食い下がってきた。

「美紗ちゃんの好きにしているから。もう、嫌がったりしないからだから許して」

「好きにしていって……、あんた本気で言ってるの？」

美紗の問いに、小夜子が真剣な面持ちで頷いた。その姿に、美紗は半眼になる。

「ふうん、そんなに許してほしいんだ」

「許してください」

小夜子のすがるような眼差しに、美紗は内心ほくそ笑んだ。許すも許さないも、美紗は端はなから小夜子との関係を絶つつもりなどなかった。ただ、自分のせいで彼女が心を痛め、憔悴してゆく様を見て

いたかったにすぎない。

「どうしようかなあ。あんたはあたししか友達がないからそんなに必死なのかもしれないけど、あたしはあんたと違って友達がいっぱいいるからさあ」

意地悪く言うと、小夜子の表情が遠目でもわかるくらい強張った。思わず口の端に加虐的な笑みが浮かぶ。それをさとられないように、美紗は小夜子に背を向けて、部屋の隅に歩を進めた。

桐箆笥を開け、祖母の遺した着物の中から、小夜子の肌に映えそうな朱色の腰紐を選ぶ。

腰紐を持つて座敷の中央に腰を下ろすと、美紗は、まるで迷子の子供みたいな顔をして立ち尽くしている小夜子を上目で見遣った。

「なにぼさつと突っ立ってんの、早くこっちに来なさいよ。縛らせられるんでしょ？」

呼ばれて、小夜子が覚束ない足取りでやって来た。フレアスカート裾を押さえ、おずおずと美紗の向かいに正座する。そうして一度大きく深呼吸すると、自ら左腕の袖を捲くりはじめた。

この一週間で小夜子の心境がどう変化したのかは知らないが、本人が大丈夫と言うくらいに覚悟はできているらしい。

しかし紺色のセーターを、前腕の三分の一ほどたくし上げたところで、唐突にその手が止まった。美紗の目から隠すように、ぎくしやくと手を胸元に引く。

「ごめんなさい。右腕に替えてもいい？」

そう承諾を求めておきながら、小夜子は返答を待たずに袖を戻しにかかった。明らかに動揺した態度。美紗はその左手首を掴むと、自分の方へ引き寄せ、袖をぐいと肘まで押し上げた。小夜子が声にならない悲鳴を上げて身をよじった。

白磁のように白く肌理きめの細かい肌には、幾筋もの痣や擦り傷がついていた。色や濃淡はまちまちで、傷の程度や経過時間は判然としないが、それが緊縛によってできたものだということはその形状から推測できた。

「これ、自分でやったの？」

手首を握ったまま訊ねると、小夜子は顔を真っ赤にした。返事はないが、耳まで真紅に染まったその反応がなによりの肯定だろう。

美紗はにやりと笑い、小夜子の耳元に口を寄せた。

「ねえ、やって見せてよ」

「えっ？」

「小夜子が自分の腕縛るところ見たい。これだけ何度もやってるんだからいいじゃない」

一つ一つ確認するように指で触れながら、美紗は傷の数を数えた。小夜子が愕然とわななく。

「え、でも、美紗ちゃんが縛るんじゃない……」

「よくよく考えたらさあ、なんであたしがあなたの言うことときかなくちゃならないわけ？ それにあんたさっき、あたしの好きにしていって言ったじゃない。あれ、嘘なの」

「嘘じゃないけど……」

小夜子の目が潤み、凧いだ湖面のような瞳の表面がゆらゆらと波立った。

「じゃあ、早くやって見せてよ」

「でも……」

美紗は舌打ちした。

「ああもうイライラするわね。やるの、やらないの、どっち？ あたしはどっちでもいいのよ。あんたと仲直りしなくなったら痛くも痒くもないんだから」

「やる。やるけど……美紗ちゃんに見られるの、……恥ずかしい」

「は？ なんて恥ずかしいの。べつに、いやらしいことするわけでもないのに」

言って、美紗は、ははあんと独り合点する。

「ひょっとしてあんた、自分で自分のこと縛っていやらしい気持ちになってるんじゃないでしょうねえ。知ってる？ そういつのまに言っつて言っつてのよ」

くくつ、と喉を鳴らすと、美紗は真新しい鬱血を指で強く押した。
「ねえ、これ気持ちいい？」

小夜子の顔が苦痛に歪み、食いしばった歯の間から、声とも呼気ともつかぬくぐもった音が漏れる。

「念のために言っとくけど、あたしはマゾじゃないから。あんたに縛らせたのは、あんたにお手本を見せてあげるためだから。最初から縛らせてなんて言ったら小夜子、怖がって逃げたでしょ」

小夜子が、がくがくと首を縦に振った。質問に対する肯定なのか、痛みゆえなのかわからない。

美紗は手を離すと、腰紐を小夜子の膝の上にほうった。小夜子はすっかり観念したらしく、無言でそれを掴むと、慣れた手つきで自身自身の左前腕を縛った。一方の紐端を膝で固定し、残りを右手でぐいっと引つ張る。

朱色の腰紐は想像どおり、いやそれ以上に、小夜子の白い肌によく映えた。美紗は自分の見立てに満足しながら、うっとり、腰紐と肉との段差を撫で回した。紐を食い込ませた柔肌の感触に、体の芯が熱を持ち、疼きだす。

ぎりぎりと、なおも腰紐は締めり続ける。小夜子が苦しげに、眉根を寄せ下唇を噛み締めた。その表情を目にしたとたん、美紗は下腹部の奥をぎゅっと鷲掴みにされたような感覚に襲われた。子宮の辺りを中心にじんじんとした痛痒さが下半身全体に拡がり、思わず腰をよじりそうになる。

「ねえ、痛い？ もっと痛くして、もっと痛がってる顔見せてよ」

美紗が興奮気味に言うと、小夜子は羞恥のためか、逃れるように面を伏せた。

けれど小夜子は、俯きながらもその手を緩めなかった。前腕が変色し、青や紫の血管が浮き上がる。時折、呻き声が聞こえる。美紗が太い血管を爪で押すと、小夜子はいやいやをするように首を振り、そのたびに、二つに束ねた栗色の髪が肩に当たって弾んだ。

しばらくして美紗は、小夜子の表情が見えないことに不満を覚え、

彼女の頬を両手で挟むとその顔を上向かせた。

「えっ……」

手中にある顔を見て、美紗は絶句した。

小夜子が淫靡な笑みを浮かべている。だらしなく緩んだ口元からは絶えず甘い吐息が漏れ、閉じた瞼がびくびくと痙攣するたびに、濡れそぼった睫毛から丸い滴くろしが落ちた。顔ばかりか首まで紅潮させ、掌の下の頬は、焼けるように熱かった。

違う、違う。自分が渴望していたのは、こんな　、こんな、快感に溺れる姿ではない。痛みに苦悶する姿なのに。

美紗は激しく落胆し、裏切られた気分たかぶで、小夜子の顔から手を離れた。

急速に気持ちが悪える。これまで小夜子に対して抱いていた加虐心や支配欲も、彼女の悶え苦しむ姿たかぶに感じた昂りや疼きも、なにもかも潮が引くように消えてゆく。

そして、貪欲に快楽を貪り、恍惚の表情で絶頂に達しようとしている小夜子とは反対に、美紗の心はどうしようもなく冷めていった。

3 窓口にて

月曜日の官公署は混んでいた。待合所の長椅子は満席で、部屋を二つに区切る細長いカウンターの向こうでは、職員達が忙しなく働いている。

白州万里江ししすまりえはカウンターの前に立つと、一度、『申請受付』と刻印されたプレートを確認してから、手の空いていそうな職員に声をかけた。

「すみません。不動産登記の申請をしたいのですが」

呼びかけに一人の職員が反応した。椅子に腰掛けてぼうつとしていた男性は、訝しげな表情で万里江を一瞥すると、そのまま視線を水平移動させて辺りを見渡した。万里江もつられて同じ方向へ首を巡らせる。

他の職員は皆一様に仕事に忙殺されている。現時点で対応が可能なのはその男性くらいなものだ。彼自身、周囲の状況を見てそれをさとつたのか、遠目にもわかるくらい肩で大きく溜息を吐くと、のっそりと腰を上げた。

不承不承といたたいてカウンターへやって来た職員は、舌打ちこそしなかったものの露骨なまでの仏頂面だった。赤ん坊を連想させるちまちました目鼻立ちに、神様の悪戯としか思えない無駄な餅肌で、不貞腐れた子供のように口を尖らせている。その年不相応な表情に万里江はカチンときた。

一体何様のつもりなのだろうか、この男。突き出た唇を渾身の力で抓り上げてやりたい。

さりとてそれを実行に移せるはずもなく、万里江は内心毒づきつつも表面上はにっこりと愛想笑いを浮かべ、持参した茶封筒から書類の束を取り出した。

「お忙しいところすみません。所有権移転が三件なんですけど」

「はあ」

「内一件は名義人の住所が変わっているので、まずは住所変更の申請を」

手短に説明しながら、申請書や添付書類をカウンターに並べていると、

「ちよつとあなたねえ、ここに勝手に書類を広げないでいただけますか」

職員が語気荒く言った。突然のことに面食らい、万里江は目をしばたかせた。相手がなにを言っているのかとつさに理解できず、脳内で男の言葉を反芻する。

早く片付けろ、と言わんばかりに職員が書類を顎でしゃくつた。隣りでやり取りをしていた職員と客とが、ちらちらとこちらの様子を窺うのが視界の端に映った。

その瞬間、カーッと頭に血が上った。職員の横柄な態度と晒し者にされた恥ずかしさで頬が上気する。鏡などで確認しなくても、自分の顔が真っ赤になっているのがわかった。

「すみません、すぐに片付けます」

万里江は紅潮した顔を見られないよう俯き加減になって、急いで書類をかき集めた。職員が聞こえよがしに溜息を吐く。

「ああ、ああ。そんな適当に重ねたらどれがどれかわからなくなるでしょう」

幼子に言って聞かせるような、小馬鹿にした物言いが追い討ちをかける。あからさまに見下され、万里江は悔しくて奥歯を噛み締めた。

本来、登記は書面審査なので申請書や添付書類に不備がなければ登記簿に記載される。申請人や代理人の人柄などは考慮されない。聖人君子を絵に描いたような申請人であっても書面に不備があれば却下されるし、見るからに胡散臭い申請人であっても書面に問題がなければ申請は通る。

だから仮に今、万里江が職員に食ってかかったとしても申請にはなんら影響しない。しかし原則そうであったとしても、実際に窓口

を努めるのは生身の人間。相手の機嫌を損ねようものなら、なにから不利益を被るのではないかと懸念し、どうしても下手に出てしまふ。

「それにねえ、そんなあれこれ一遍に言われてもこっちは把握しきれませんよ。一件ずつ処理していきますから、まあ、落ち着いて」

語尾に嘲笑を滲ませ、職員が言った。人の神経を逆撫でする喋り方は故意なのか。そうだとしたら相当陰湿だ。苛立ちを募らせながらも、万里江は黙って手を動かした。

「ここではなんですので移動しましょうか。こちらへどうぞ」

万里江が書類を回収し終わると、職員がカウンターの内側から出て来た。案内されたのは部屋の奥、折り畳み式の長机とパイプ椅子がいくつも並ぶ一画だった。そのうちの一つに、二人は向かい合って座った。

「では、拝見しましょうか」

職員が、団子鼻の上に乗った銀縁眼鏡をぐいと持ち上げた。レンズの奥の冷たい瞳は爬虫類を彷彿とさせる。

万里江は書類を申請ごとに仕分けると、まずは一件だけ職員に手渡した。職員はその束を捲りながら、独り言とも問いかけてもつかぬ音量で、

「登記の目的は所有権移転、原因は売買、と。添付書類は ああ、揃ってますね」

「はい。でもそれ、名義人の住所が変わっているので併せて住所変更を」

これなんですけど、と万里江は別の書類を差し出した。途端、職員の間際に深い縦皺が寄った。

「だったらそっちを先に出示してくださいよ。こういう場合、住所変更が先、所有権移転が後。これくらい常識でしょう」

出す順番が前後しただけでその言い草はないだろう、と万里江は内心憤りを感じた。だが実際に口から出たのは、

「すみません……」

と、力ない謝罪の言葉だった。万里江はしおらしく頭を垂れるふりをして、職員の手元を睨み付けた。

こんな無様な姿を晒すはめになるとは、なんという屈辱。それもこれも全部この男のせいだ。初っ端の動揺が尾を引いて、すっかり調子が狂ってしまった。血圧は上昇しっぱなしで頬の熱も引かないし、最悪だ。

のぼせて軽い目眩に襲われる万里江をよそに、職員は申請書の文字列を鉛筆でなぞり、要所要所で片仮名の『レ』に似たチエツクマークをつけてゆく。男は人並み外れて筆圧が高いのか、それは紙に穴が開きそうな勢いだった。

不意に職員の手が止まった。

「ここ、間違ってますね。どうしてこういう書き方をしたんですか」
言って、問題の箇所をカツカツと鉛筆で突いた。砕けた芯が四散して、書面が汚される。自分の作成した申請書がぞんざいに扱われるのを、万里江は忌々しい思いで、けれど抗議することもできずにとだ見つめた。

「そういうふうに入力するものだと思っていたものですから」

「どうしてですか？」

どうしてもこうしても、それが正しい記入方法だと思ったからそうしたまでだ。他意はない。今そう説明したではないか。これ以上どう返答しろと言うのか。

「勘違いしていました」

「どうしてですか？」

「どうしてって……」

問い詰められて、万里江は閉口した。確かに自分はミスをした。だが正直そこまで重大な誤りではない。それなのになぜこうも執拗に追及するのか。

もしかしてこの職員、ミスを誘発する原因を究明し、未然に防ぐ対策を講じるべくこうして聞き取り調査をしているのか。いや、どう鼻屑目に見てもそこまで仕事熱心には思えない。

「ねえ、どうしてですか？」

職員にじとつとした目で見据えられ、万里江は蛇に睨まれた蛙の気分になった。背筋がゾクゾクする。動悸が激しくなり、全身の毛穴が開いて脂汗が滲んだ。

動揺をさとられまいと、万里江は早口で答えた。

「勉強不足です、すみません」

「ふうん、まあいいでしょう。次からは気を付けてくださいよ。正しくはこう記入します」

職員は間違えている箇所二本線を引くと、相変わらず力強い筆致で訂正文を書き込んだ。その間、沈黙が訪れる。

静かになると、なぜだか急に、職員との一連のやり取りが脳裏に再現された。その一つ一つを振り返り、万里江は妙な違和感を覚えた。

これまで自分の身体に起こった諸々の生理反応は、確かに職員に対する憤りや緊張などからくるものであった。だがそれとは別種の感情により、しかし同種の生理反応が起きている気がするのだ。

職員に見下され、責め立てられ、蛇のような目で睨まれると、胸が高鳴り、顔が火照る。頭の芯がぼうつとして思考が麻痺する。これではまるで、まるで、被虐されて興奮するマゾヒストのようではないか。

「大丈夫ですか、理解できましたか」

「は、はい。大丈夫です。問題ありません」

沈黙を破る低い声に心臓が大きく跳ねた。

万里江は、おぞましい結論に達した自分自身に愕然とし、すぐさま否定した。自分がそんな変態であるはずがない。飛躍しすぎだ。

そうだ、これはきつと吊橋効果に違いない。吊橋を渡る恐怖によるドキドキと恋愛のドキドキとを錯覚してしまうというあれだ。現状もそれと同様の心理が働いているのだらう。動揺、羞恥、怒り、緊張などによる興奮と被虐による興奮とを混同しているにすぎない。「えーと、白州さん。ここなんですけどね」

万里江が冷静になるのを見計らったように、職員が書面の中央辺りを指差した。万里江はその指先を覗き込んだ。

「ああ、そこ、お尋ねしようと思っただけです。端数の処理について」

「あのねえ、白州さん。今、私が話してるでしょう。だからちよつと黙っててくれませんか。あなたの質問は後で受け付けますから、それまでは私が尋ねたことにだけ答えてください。いいですね」

万里江の言葉を遮り、職員がきつい口調でぴしゃりと言いつつ、平静を取り戻しかけたやさきに、ふたたび、心臓が痛いほど脈打つ。眼鏡越しの蔑むような視線に、快感に似た感覚を覚え、万里江は心の中で激しく頭を振った。これはきつと不整脈。体調不良に違いない。

思えば、動悸、火照り、のぼせ、目眩などといった身体の変調は更年期障害の典型的な症状と合致するではないか。最近、若い女性の間で増加している若年性更年期障害は、ストレスが誘因になるとも聞いている。そうだ、ストレスのせいで馬鹿げた考えに捕らわれているに違いない。

とはいうものの、一度芽生えた疑念はそう簡単に払拭できるものでもなく、むしろかたくなに否定すればするほどその考えが頭から離れなくなってしまうた。

おかげで、その後一時間に及ぶ添削と指導の間ずっと、万里江は突如降って湧いた己のマゾ疑惑と闘い続けるはめになったのだった。

明くる日、万里江はふたたび官公署を訪ねた。職員に補正を命じられた箇所を直し、再度、申請するためだ。カウンターの前に立つと昨日の男性がやって来た。

「どうですか、できましたか」

「はい。おかげさまで」

万里江は会釈して書類の束を手渡した。職員はそれをぱらぱらと確認すると、

「やればできるじゃないですか」

につ、と白い歯を見せた。前日とは打って変わって友好的な態度。一体どういう心境の変化なのだろうか。正直、不気味だ。思わず、なにか裏があるのではないかと勘繰ってしまふ。

ともあれ、改めて職員と対峙してみて、自分の中に芽生えたマゾ疑惑は晴れた。こうして男性と話していても、毛の先ほどとも気持ち^{たかぶ}が昂らないのだ。やはりあれは錯覚だったのだ。自分は紛うことなき真人間だ。

「ありがとうございます。で、次はこれなんですけど」

すっかり安堵した万里江は、鞆から茶封筒を引っ張り出し、てきぱきとカウンターに書類を並べた。間髪を入れずに職員が声を荒げる。

「だから、ここに書類を広げるなって言ったでしょう」

万里江はびくつと首をすくめた。職員の顔から笑みが消え、冷やかな双眸がねめつける。

ああ、まずい。ドキドキする。

万里江は小さく身震いした。

4 境内にて（前編）

鄙^{ひな}びた神社の手水場^{てうずずば}にカナヘビが一匹。自然石を積んだ質素な手水鉢^{てうずずば}の縁^{へり}で甲羅干^{こうらかん}しをしている。

志保^{しば}は拜殿^{ひがき}の階段^{かいたい}に学生靴^{がくせいぐつ}を置くと、足音を忍ばせ、獲物を狙う猫^{ねこ}さながらの身のこなしで間合^{まあひ}いを詰めた。

新緑の木洩れ日を全身に浴び、カナヘビは気持ちよさそうにじつと目を閉じている。四肢を広げ、細長い尾を石の形に添寄せた格好は、全身で石に抱き付いているふうにも見える。手水場に張り出した楓の枝が風にそよぎ、褐色の鱗に覆われた流線型の背の上で、幾何学模様の光と影がくるくると踊っていた。

志保は息を凝らし、そろそろと右手を伸ばした。指先が触れる刹那、手水鉢の水面で乱反射した光が目を射り、眩しさに一瞬、目をそばめた。

次の瞬間、視界に映ったのは、鉢の縁から放物線を描いていて跳ぶカナヘビの姿だった。

カナヘビは苔むした地面に音もなく着地すると、一度、辺りを窺うように首を巡らせ、志保と反対の草むらへ逃げ込んだ。志保は素早く脚を伸ばし、尾を踏んでそれを阻止した。玉シダの茂みに体半分滑り込ませた状態で尾を押さえられたカナヘビは、それでもなお前進しようと密集した茎の隙間でもがいていた。

志保はスカート^{スカート}の裾^{すそ}が汚れるのもかまわずその場にしゃがむと、カナヘビが自切^{じせつ}して逃げてしまわないように尾の付け根を指でつまんで、茎にしがみ付いて必死に抵抗するのを力ずくで引っ張り出した。

「ふふ、……かわいい」

胸の側面部を三本の指で挟み、目の高さを持ち上げて形態を仔細に観察する。爬虫類には表情がないと言われるが、そののっぺりとした顔には今まさに恐怖の色がありありと浮かんでいた。

警戒を解くために優しく頭を撫でた。しかしそれはカナヘビにとって攻撃以外のなにものでもなかったらしく、撫でれば撫でるほど、拘束から逃れようと四肢をばたつかせ、尾を振り回した。そうして、上体をくの字に折り曲げたかと思うと、裂けんばかりに口を開け、胴体をつまんでいる指に噛み付いた。

カナヘビは指に食らい付いたまま、志保の顔を上目使いに見た。それはまるで反撃の効果を探っているかのごとき素振りだった。至近距離で見つめ返すと、カナヘビはガラス玉のような眼球を剥き出しにしてさらにきつく歯を立てた。

けれど、普段、クモや昆虫の類いを捕食している鋭い歯も、人間の肉を引き裂き骨を噛み砕くことはできないようだった。噛まれた指も、バネの緩んだ洗濯バサミで挟まれたくらいの痛さしか感じない。きつと皮膚にはかすり傷ひとつついていないだろう。

それでも死に物狂いで食らい付く様に、志保の胸は高鳴った。恐怖と絶望でカナヘビの真つ黒な瞳孔が開いてゆくのを見ていると、身体の芯が熱くなった。

志保は幼少の頃から、自分の手の中で怯え、抗^{あらが}うカナヘビの姿に、なぜだかどうしようもなく気持ち^{たかぶ}が昂るのだった。けっして恐怖や苦痛を味わわせたいわけではないのに、嫌がってもがく様子がたまらなく可愛くて執拗に弄んでしまう。全身全霊で抵抗されると愛しさが込み上げてきて、歯止めが利かなくなる。

この矛盾した、けれど抑えがたい衝動はいつたいなに起因しているのか、どういう心理的メカニズムにより引き起こされているのか、志保にはわからなかった。ただ、そういう得体の知れぬ欲望を満たすためにカナヘビを捕らえ、弄ぶことが褒められた行為でないことは十分理解していた。そして理解しているからこそ、自分はいけないことをしているという背徳感からいつそう興奮してしまうのも、また、事実だった。

志保は指を噛ませたまま、逆の人差し指で、鼻先から尾へと連なるゆるやかな曲線を撫でた。部位によって形状の異なる鱗は指の腹

に様々な刺激を与えてくれる。頭から尾へと撫で下ろすのと、逆に撫で上げるのではまた違った質感だった。

たっぷり時間をかけて背面の感触を堪能していると、観念したのかカナヘビは口を離し、大人しくなった。仰向けにして腹部をさらす。腹面は、褐色の背面とは対照的に淡い黄白色をしていた。

志保はカナヘビの下顎のフォルムがとても好きだった。頂角の丸い二等辺三角形。下唇から喉へのライン。磁器のように滑らかな顎の裏に触れると、喉がびくんびくんと上下に震えた。顎から喉を伝い、胸へと指を這わせる。乾燥してざらりとした背面に比べ、腹面の皮膚は柔らかく、弾力があつた。

患者を触診する医師のような手つきで、指先に全神経を集中して心臓の鼓動を探す。

「おねえちゃん、なにしてるの？」

唐突に頭上で少年の声がした。

ぶかぶかの制服に身を包み、真新しいランドセルを背負って立っていたのは、志保の家の斜向かいに住む子供だった。確か、名は睦月つきといったか。家が近所とはいえ高校生と小学生ではあまり接点がないので名前くらいしか知らない。

「なんでもないわよ」

楽しみを邪魔された腹立たしさと、秘め事を目撃されてしまった後ろめたさから、つい険のある物言いになる。

「ねえねえ、それ、トカゲ？」

邪険にされて立ち去るかと思つたが、睦月は意に介するふうでもなく、ランドセルをカタカタ鳴らして志保の正面にしゃがみ込んだ。揃えた両の膝頭にちょこんと手を乗せ、つぶらな瞳を爛々と輝かせている。

「トカゲじゃないわよ、カナヘビ」

「えっ、ヘビ？」

「いや、名前にヘビについてるけどトカゲの一種」

「イツシュツ、ってなに？」

睦月が小首を傾げた。

「仲間ってこと」

「ん？ おねえちゃん、さっきトカゲじゃないっていった」

「そうよ、厳密にはカナヘビはトカゲじゃないわよ。ニホンカナヘビはトカゲ亜目カナヘビ科でニホントカゲはトカゲ亜目スキンク科だもの。そもそも見た目が違うじゃない。カナヘビは鱗が岩みたいにごツごツしてて、トカゲはツルツル。尻尾だってカナヘビのほうが長いし……って言ってもわかんないか。まあいいわ、家に帰って図鑑で調べなさいよ」

志保は説明するのが面倒になって、話を途中で切り上げた。睦月は説明の半分も理解できていないふうだったが、それでも、うん、と力強く頷いて満面に笑みを浮かべた。

沈黙が訪れ、志保は気詰まりになった。睦月はカナヘビに興味津々で一向に帰る気配がない。身を乗り出し、志保の手の中を食い入るように見つめる少年の短く刈った黒髪から日向ひなたの匂いがする。それがまた志保を落ち着かなくさせた。

幼い指が躊躇ためらいがちにカナヘビの頬をつつく。手中のカナヘビは身をよじり、釣り針型に曲げた尾で志保の手の甲を叩いた。

「すごい！ キョウリュウみたい」

睦月が興奮して叫ぶ。

「ねえ、ボクにももたせて」

「えっ」

「いいでしょ？ すこしだけ、ねっ、ねっ」

前腕にまつわり付く睦月の生温かい手が鬱陶ひなたしくて、

「……少しだけだからね」

志保は渋々承諾した。カナヘビを手渡すさい、絶対に逃がさないでよ、とあらかじめ釘を刺しておく。

「わあ、ザラザラしてる」

「ちよっと！ そんなに強く握ったら潰れちゃうでしょ」

無遠慮に握り締められてカナヘビは、目を剥き、苦しげに口をば

くばくさせている。

「……ごめんなさい」

睦月は申し訳なさそうに首をすくめて見せたが、頭の中はカナヘビでいっぱいらしく、すぐに手の中のカナヘビに夢中になった。鱗を撫でたり、尾をつまんだり。注意されたこともあって始めのうちこそ慎重に扱っていたが、しばらくするとまた扱いが乱暴になった。幼い睦月には力加減が難しいのだろうか。志保は気が気でなかった。「もういいでしょ、返して」

そう声をかけたが睦月の耳には届かなかつたらしく、少年は高く掲げたカナヘビを下から覗き込んできゅきゅと無邪気な歓声を上げていた。

「いいかげんに返しなさいよ」

再三の催促にも従わないことに痺れを切らし、志保はカナヘビを腕^{うで}ずくで奪い取るうとした。睦月はいやいやと頭^{かぶり}を振り、それを拒んだ。

「わあっ！」

揉み合う拍子にカナヘビが睦月の指に噛み付いた。睦月はパニックを起こしてカナヘビを振り払った。振り落とされたカナヘビは無残に地面に叩き付けられ、二度、三度、と弾み、遠くまで転がった。「なんてことするの！ 死んだらどうするのよ！」

志保は声を荒げ、睦月の肩を突き飛ばした。もともと腰を浮かせた不安定な体勢だった睦月は、実に呆気なく後方に倒れた。

睦月はランドセルを支点にして、仰向けにひっくり返った亀のように手足をばたつかせてもがいていた。さすがにやり過ぎたかと反省し、

「大丈夫？」

助け起こそうと傍らに寄った。

半袖の開襟シャツの中で小さな体が泳いでいた。反らした喉は健康的に日焼けして、真っ白なシャツと褐色の肌のコントラストが目眩しい。顎の裏はカナヘビよりも頂角の大きな二等辺三角形だった。

た。

視界の端を褐色の物体が横切った。視線を向ける。茂みの陰に、カナヘビの長い尾が吸い込まれるように消えた。

「あーあ、逃げちゃった……」

ぼつりと呟いて、志保はやおら睦月の上に跨またがった。睦月の双眸が驚愕に見開かれる。志保は、何者かに操られるように緩慢な動作で睦月の喉元に腕を伸ばした。

睦月の細い首は両手にすっぽり納まった。柔らかく滑らかな皮膚、掌を押し返す肉の弾力、首筋ににじむ汗、体温、それらすべてがカナヘビのそれとは違う。抵抗する力の強さも段違いだった。

「……くるし……い」

志保の下で睦月が暴れる。靴の踵が湿った土をえぐる音。むせ返るような草いきれに混じる汗の匂い。服の中にこもった熱気が襟元から這い出して、志保の手首をぞろりと撫ぜた。

「痛っ」

前腕を引つ搔かれ、志保は我に返った。手を離し、睦月の半身を起こしてやる。睦月は気管の圧迫を解かれて激しく咳き込んだ。目尻に涙を溜め、肩で息をしている。

志保はランドセルにこびり付いた泥や苔をハンカチで払いながら、睦月の耳元に口を寄せて囁いた。

「このことは誰にも言っちゃだめよ。二人だけの秘密」

わかった？ と念を押すと、少年は黙って頷いた。

4 境内にて（後編）

木製の鳥居は長い歲月雨風にさらされて白茶けていた。しめ縄から千切れ飛んだであろう紙垂しでの切れ端が数枚、柱の中ほどにへばり付いた状態で干乾びている。

志保は鳥居をくぐり、拝殿目指してベビーカーを押した。振動で赤ん坊が目を覚ましてしまわないよう注意しながら、木洩れ日の射す参道に行く。神社の境内はそう広くはなかったが、地面のそここに生えた苔が車輪の進みを悪くして、拝殿に辿り着くのに時間を要した。

切妻造の拝殿は造営からどのくらい経っているのか。所々に修繕の跡は見られるものの老朽化が激しく、全体的にすすけた印象がする。天井の梁はりから下がる鈴に張ったクモの巣や、賽銭箱の梯子状の蓋に引つ掛かった落ち葉が、参拝する者がめつたにいないことを如実に物語っていた。

志保はベビーカーを拝殿の階段前に止めると、幌ほろを上げて中を覗いた。さつきまでぐずっていた赤ん坊は、目尻に涙の粒を付けたまま、すやすやと寝息をたてている。ガーゼのハンカチで顔の汗と涙を拭いてやってから、志保は階段に腰掛けた。

自分も額の汗を拭ぬぐい、ハンカチを扇子代わりに首元に風を送る。庇ひさしごしに仰ぎ見る初夏の空は抜けるように青く、寝不足の目にしみた。

志保は強い眩暈めまいを覚え、瞼を閉じた。視界が遮断されると意識のすべてが身体の内へと向かい、それまで気力で押さえ込んできた眠気や疲労がいつきに噴き出した。

こめかみが脈打つように痛み、吐き気がする。瞼の裏で赤や白の閃光せんこうが飛ぶ。ふうつと意識が遠のきかけた瞬間、

「お姉さん、大丈夫？」

気遣わしげな声がそれを引き戻した。

目を開けて見れば、ベビーカーの脇に青年が一人、立っていた。彼は涼しげな短髪にひよろりとした体躯で、志保の母校の制服を着ていた。

「ええ、大丈夫」

答えて、脂汗で額に張り付いた前髪をかき上げた。

「そう？ 顔色が悪いけど」

「本当に大丈夫、少し寝不足なだけだから。それにしてもあなた、見ず知らずの相手を心配するだなんてずいぶん親切なのね」

疑うような青年の視線が気まずくて志保は話を逸らした。すると青年はわずかに目を丸くして、

「いやだなあ、見ず知らずなんかじゃないよ。僕だよ、睦月。家、近所じゃないか」

「睦月……君？」

志保は朦朧とした頭で、記憶の抽斗ひきたしから睦月に関するデータを探した。記憶の中の睦月は幼く、眼前の青年との類似点といえば短髪で細身であることくらいだった。

「ああ、ごめんなさい。すっかり変わってるものだから誰だかわからなかったわ」

「まあ、成長期だからね。でもお姉さんはあんまり変わってないね」
声変わりして低くなった声で言う。もともと子供の頃、そう親しくしていたわけではないから、どれだけ変化しているのかなどわかりもしないのだが。

「そんなことないわよ。子供を産んで体形も崩れてしまったし」

「そう？」

「そうよ」

「そうなんだ……。ところでお姉さん、今でもカナヘビ捕まえたりしてるの？」

「え？」

全身に冷水を浴びせられたような気がした。脈絡なく発せられた問いだったが、睦月の言わんとしていることは察しがつく。

十年前、志保は過ちを犯した。ここで睦月の首を絞めた。魔が差した、としか言いようがない。志保自身、自分の行為に愕然とした。そして睦月に謝罪するどころか、避けて、逃げて、この地を離れてすべてをなかつたことにしようとした。

志保が睦月という存在から目を背けていた間、彼はきつと志保を恨み続けていたにちがいない。再会を果たした今、積年の恨みをもつて志保を糾弾しようとしているのだ……。

「昔、ここで捕まえてたじゃないか」

「……そうだったかしら？」

絞り出した声はかすれ、自分の耳にも白々しく聞こえた。しらを切ったところで、核心に触れるのが数秒もしくは数十秒遅れるだけだとわかっていて、それでも無駄なあがきをした。

「そうだよ。爬虫類相手に欲情してた」

「なつ、なに言ってるの。べつに欲情なんてしてないわよ」

「なんだ、ちゃんと憶えてるじゃないか」

睦月が楽しそうに声をたてて笑う。

「じゃあさ、僕にしたことも憶えてるよね。僕、あの時のことを今でもよく夢に見るんだ。お姉さんが僕の首を絞める夢」

首筋を、ねつとりとした嫌な汗が流れ落ちてゆく。志保を見据える睦月の双眸はガラス玉のように冷ややかで背筋が凍った。

「ごめんなさい。謝ってすむことじゃないけど、本当にごめんなさい。あの時、……私、どうかしてたんだわ」

志保は祈るような格好で、握り締めた拳に額を擦り付けた。

「いや、そうじゃないんだ。確かに首を絞められて苦しかったし、怖かった。でも、あの時感じたのはそれだけじゃなかったんだ」

衣擦れと、硬い靴底が土を踏む音。睦月が近づく気配がする。

「お姉さん、僕、首を絞められる夢を見て夢精するんだ」

思いもよらぬ告白に、志保は我が耳を疑った。これならまだ、恨み辛みや罵詈雑言を浴びせられたほうがましだと思った。睦月は続ける。

「ねえ、知ってる？ 幼児期の性的体験は人格形成に影響するんだってさ」

「性的って……、私、そんなつもりじゃ……」

志保は弾かれたように面を上げた。睦月にはやにやと笑っていた。「お姉さんがどういいうつもりで僕の首を絞めたかなってどうでもいいんだ。現に僕が首を絞められて、性的快感を覚えたことが重要なんだよ」

睦月は階段下のたたきにひたひた跪くと、志保の両手首を掴み、掴んだ手を自分の首に押し当てた。

「お姉さん、あの時みたいに僕の首を絞めてよ。学校の女どもは、普段、大人ぶってるくせにいざとなったら怖気づくんだ。気味悪がつて、誰も僕の首を絞めてくれないんだ。だから、ねえ、お願い」「いやっ、やめて！」

「どうして？ お姉さんはサドなんですよ。僕、知ってるよ。カナヘビいじってた時も、僕の首を絞めてた時も、お姉さん笑ってた」睦月が喋るのに合わせて上下する喉仏の動きが、握り拳の指の背に直に伝わる。その生々しい感触に志保の総身は栗立った。

身の危険を感じて必死に抵抗するが、睦月は微動だにしない。圧倒的な腕力差。今目の前にいるのは、あの日、志保が組み敷いた小さな少年ではないのだと、否応なしに実感させられる。ただただ恐ろしかった。

「放して！」

金切り声を上げ、志保は靴の爪先で睦月の太腿をめいっぱい蹴り上げた。睦月が低く呻いて前屈みになる。手首の拘束が緩んだ隙をつき、志保は睦月の手を振りほどいて脱兎のごとく逃げ出した。

鳥居をくぐり、未舗装の薄暗い杉木立を抜け、脇目も振らずに走った。振り返れば追いつかれそうな気がして前だけを見た。ベビーカーの骨組みにしたたか脛すねを打ち付け、何度も転びそうになる。激しい振動に赤ん坊が目覚まし泣き叫んだが、しゃにむに足を動かした。

走りに走って、気づけば町外れの停留所に志保はいた。真っ直ぐに延びる一本道に人影はなく、車も通らない。民家もまばらで、道路沿いには竹林が広がっていた。

足を止め、ベビーカーにもたれて息を整える。口腔内が乾燥してうまく呼吸ができない。乾いた喉の粘膜は空気が通過するたび、針で刺すようにぴりぴりと痛んだ。

「……もう……大丈夫……よ」

荒い息を吐きながら、志保はもつれる足でベビーカーの前に回り込んだ。赤ん坊は顔を真っ赤にして、火がついたように泣いていた。抱き上げようと手を差し伸べる。涙と汗で後頭部やうなじはおろか、シートもぐっしより濡れていた。首筋の皺に溜まった汗を指で拭う。湿った肌はつきたての餅のように柔らかく、母乳の甘い匂いがした。

志保は、尻の下に差し込んでいた左手を抜くと、両手で赤ん坊の首を撫でた。ふっくらとした肌触りは、睦月のそれとは違う。厚い脂肪に覆われて筋や骨には触れないし、発達した喉仏もない。手に残る睦月の感觸を消したくて、志保は赤ん坊の首をさすり続けた。なかなか抱いてもらえず、赤ん坊はむずがって手足をばたつかせた。暴れて振り回す小さな拳が志保の腕を叩く。安堵と、愛おしさが込み上げてきて目頭が熱くなった。

「……なあーんだ。お姉さん、抵抗されないと興奮しないんだ。だから僕の首を絞めてくれなかったんだね」

「ひっ」

突然、背後から耳朶じだに生温なまぬるい息がかかり、志保は飛び上がりそうになった。心臓が早鐘を打つ。早く逃げなければ、と気は急ぐが、頭のとっぺんから足の爪先まで金縛りにあったようにぴくりともしない。

背中ごしに睦月の手が伸びて、志保の手に重なった。

「……やめて」

膝がわなないて立っていることすらままならない。睦月が志保の

手ごと赤ん坊の首を絞めた。赤ん坊は泣いて身をよじり、激しくベビーカーを揺らした。志保は悲鳴を上げた。

「やめて！ あなたの言うとおりにするから、……だからお願い、……子供には手を出さないで」

睦月の手が放れ、唇が耳に触れる。低い声が囁く。

「このことは誰にも言っちゃだめだよ。二人だけの秘密」
「わかった？ と念を押され、志保は黙って頷いた。」

おまけ 『SM二元論の主張』パロディ（前編）（前書き）

『SM二元論の主張』<http://ncode.syosetu.com/n5746j/>（作者：りきてつくすさん）のパロディです。

「SMプレイ中にハッスルしすぎて窒息死、成仏できずに下界をさまよう若い女性の幽霊」という設定をお借りしました。

おまけ 『S M二元論の主張』パロディ（前編）

「 あんたさあ、ドMになっちゃいなさいよ」

鼻にかかる甘ったるい声。女のぽってりとした肉感的な唇が妖しく蠢くたび、厚く塗られたグロスがてらてらと外灯の明かりを反射する。

昼間の熱気がこもる公園は夕涼みに適さないからか、園内には淑子と女以外、人影はなかった。二人は、敷地隅の木陰に設置されたベンチに、人一人分の間隔をあけて座っていた。

「すみません。おっしゃっている意味がよくわかりません」

女の発する言葉は紛れもなく日本語なのに、まるで外国語のように理解不能で、淑子は軽い眩暈を覚えた。

買い物帰りに公園のベンチで休憩。偶然隣り合わせた見知らぬ他人とのちよつとした世間話が、身の上話を経て人生相談に発展するのはままあることだ。だが、嫁姑問題で悩んでいる人間に対する回答が「ドMになれ」というのはそうそう聞いたことがない。

「いやだわあ、かまととぶっちゃって。ドMっていったら虐められて興奮する最上級のマゾヒストのことじゃないのよ」

「いえ、あの、単語の意味じゃなくて……」

女は自分の提案に絶対の自信を持っているらしく、淑子がそれを遠回しに拒否しているとは微塵も思っていないふうだった。

「じゃあ、なにがわからないの？ あんたがわからないことがわからない」

心底不思議そうに尋ねられ、淑子は返事に窮した。古代エジプト人ばりに濃いアイメイクの双眸に凝視され、全身の毛穴からねっとりとした脂汗がにじみ出る。膝の裏に溜まった汗が一筋、また一筋とふくらはぎを伝い落ちる感触が不快で思考がうまくまとまらない。淑子は深く考えるのをやめ、膝に乗せた両手に視線を落とした。

しばしの沈黙の後、女がじりじりとにじり寄る気配がした。ベン

手に腰掛けたまま器用に尻だけを動かして迫り来るのが不気味で、淑子もベンチに腰掛けたまま逆方向へと逃げる。が、傍らに置いておいた買物袋に阻まれ、すぐに退路を断たれてしまった。

女はびつたりと太腿を密着させると、腰をひねり、淑子の左手に両手を重ねた。その掌は氷のように冷たかった。それもそのはず、女は幽霊なのだから……。

水仕事とは無縁そうな、綺麗にマニキュアの施された手を透かして、淑子の所帯じみた手が見える。女の触れている薬指の指輪が痛いくらいに冷え、女が生身の人間でないことをいやおうなしに突き付けられる。

硬直する淑子の耳元で女が囁いた。

「だってあんた、姑にいびられて辛いんでしょう？ でも旦那は姑との別居を認めないし、あんたはあんたで旦那と離婚するつもりはない。現状が変えられないならあんたが変わるしかないじゃない。」

ああ、姑を改心させようつたつてムダよ。歳食ってるぶん頑固だし、そもそも相手にしてみりゃ、あんたは可愛い息子を寝取った泥棒猫なんだから」

「寝取るだなんて、そんな」

淑子はぎよつとして横目で女を見た。女がにい、と口角を吊り上げる。

「あら、母親にとって息子は恋人みたいなものらしいわよ。だから嫉妬して嫁いびりするんでしょう。それにしても泥棒猫って素敵な響きよね。『この泥棒猫！』とか『このメス豚！』とかそういう台詞が飛び交う修羅場、生きてる間に一度は経験しておきたかったわ。それでね、取っ組み合いの喧嘩するの。キャットファイトよん。ああんっ、想像するだけで興奮しちゃう」

そう叫んで女は、両腕で自身のスレンダーな体をかき抱くと、なにやら奇声を発して身悶えはじめた。

半透明な上半身が右へ左へくねくね動く様は、あたかも壊れた映写機の映し出す映像のようで、淑子は女に相談したことを激しく後

悔した。もつとも、淑子が相談を持ちかけたわけではなく、女に敏腕刑事顔負けの尋問を受けた結果の不可抗力なのだが。

身をくねらせる女の肩越しに公園の時計が見えた。

「あの、盛り上がっているところすみません。私そろそろ帰らないと」

針の示す時刻を目にして、淑子は慌てて腰を上げた。女が不満気に口を尖らせる。

「なによ、まだ話はすんでないわよ」

「本当にすみません。でも、夕飯の支度の途中で買い物に抜けたので、あまり遅くなると姑に叱られてしまいますから」

淑子がぺこぺこ頭を下げると、女はすうつと目を細めた。

「あんた、そうやって一生、姑の奴隷やってくつもり？」

見下すように言われ、淑子は買い物袋の取っ手をきつく握り締めた。

「だって、しかたないじゃないですか！ 姑に逆らえば家を追い出されるのは目に見えています。当然、夫とも離婚することになるでしょう。そうなら私、どうすればいいんですか？ 実家に戻ることも出来ず、一人暮らしにも先立つものがない。働けばいいって思われるでしょうけど、私みたいに短大を出てすぐに家庭に入ったような、世間知らずで職歴のない人間を雇ってくるところなんてないんです。……だから、いやでも我慢してるんじゃないですか。好きで奴隷やってるわけじゃありません！」

淑子は髪を振り乱してまくしたてた。一度不安を口にすると、日々押さえ込んできた感情が堰を切ったようにあふれ出した。

鼻の奥がツンとして視界がにじむ。唇を引き結び、涙がこぼれそうになるのを耐えていると、女が手を引いてベンチに座らせた。

「だからあ、あんたがDMになりさえすれば万事解決するって言うてるでしょう。うだうだ言っていないでさっさとDMになっちゃいなさいよ」

ぞんざいな物言いとは裏腹に、淑子の背中をさする女の手は優し

かった。幼子をあやす手つきで撫でられていると、出会って間もない相手に真情を吐露してしまったことが急に気恥ずかしくなって、淑子は苦笑した。鼻を噉り、気持ちを落ち着けてから尋ねる。

「やっぱり、あなたの言うことは意味がわかりません。それでなにがどう解決するっていうんですか？」

ぴんと立てた人差し指を淑子の鼻先に突き付け、女は教師然として答える。

「いい、マゾヒストってのはね、肉体的精神的苦痛によって性的快感を得るものなの。言い換えれば、普通の人間が苦になることが苦にならない。つまり、現時点であんたには被虐趣味がないから姑の虐めが苦痛にしか感じられないけど、あんたに被虐趣味があれば姑の虐めも苦にならないってわけ。おわかり？」

「確かに、人によつてはその理屈も成り立つかもしれないけど、私には無理です。だいたい、そういう性癖は持つて生まれたものじゃないんですか。なるうと思つて簡単になれるものではないでしょう。」

女はちゅちゅ、と舌を鳴らしながら、立てた指を左右に振った。

「そういう決め付けはよくないわよ。自分で自分の可能性を閉ざしちゃダメ。あたしもね、死ぬまでは自他ともに認める生粋のドMだったんだけど、っていうか実際それでハッスルしすぎて死んじゃったんだけど。」

けらけらと笑つて女は、自身の性癖や死の経緯を事細かに話して聞かせた。緊縛プレイの最中に窒息死し、腐乱死体で発見されたくだり淑子は具合が悪くなり、話しを遮った。興奮気味に語っていた女は話の腰を折られ、一瞬、儼然とした面持ちになったものの、すぐに話題を変えた。

「まあ、そんなこんなでドMとして短い生涯を閉じたわけだけど、成仏できずにこうやつて下界をさまよつてるうちに、ひょんなことからDSとして開眼しちゃったのよん。人生どう転ぶかわかんないものね。あんたも、『でも』とか『だって』とか否定的なこと

ばっか言っていないでトライしてみなさいよ。っていうか、あんたのその自虐的で自己犠牲な性格、マゾヒストの素質十分だから」

「……かいかぶらないでください。私こう見えて、痛いのも熱いのも苦手なんです」

「いやべつに、姑とSMプレイしろなんて言っていないから……」

「ああ、そうですね、すみません。なんだか頭が混乱して」

淑子は額を押さえた。女の強烈な体験談を聞いた後では、自分がマゾヒストになるなどとうてい無理なことと思えた。女のように本能のまま快楽を求めることは、理性に凝り固まった淑子には難しい。そう正直に告げると、

「あんたつてば、頭でつかちすぎい。そうやってぐちゃぐちゃ考えるから気苦労が絶えないのよう」

「はあ。でもこれが私の性分ですから」

「んー、めんどくさい女ねえ。あつ、そくだ、結婚は永久就職だつていうじゃない。会社で生き残るためにはスキルアップも必要よね。あれこれ難しく考えずに、まずは通信講座でも受講するくらいの軽い気持ちでチャレンジしてみたら？」

「そんなアブノーマルな通信講座、聞いたことはありません」

「んもうつ、あー言えばこー言う！人がせつかくあんたのレベルに合わせて話してやってるっていうのにい！しょうがないわねえ、こうなつたら奥の手を使うしかないわね」

そう言つて女は淑子の顔を両手で挟むと、勢いよく頭を九十度横向かせた。突如、至近距離に女の派手な顔が現れ、淑子は目のやり場に困つて視線を泳がせた。顔を背けようにも、女のものとは思えない強い力で固定され、微動だにしない。

女の顔が近付く。あんまり気乗りしないけど、と言いながもその口元には笑みが浮かんでいた。

「なにふるんれすか、やめてくらはい……」

淑子は抵抗を試みたが、頬を押さえられて呂律が回らない。さらに接近して、女の放つ甘酸っぱい香りが鼻腔をくすぐる。

「大丈夫、大丈夫、睡眠学習みたいなものだから。あんたの代わりに、あたしがあんたを立派なDMに開発してあ・げ・る」

ついに女との距離はゼロになり、淑子の唇に女の唇が重なった。

「んんー」

淑子は悲鳴を上げた。それは、接吻などという生易しいものではなかった。女は淑子の口にヒルのように吸い付いたかと思うと、その肉厚な舌で固く閉じた歯列を強引にこじ開け、口腔内に侵入してきた。そしてナメクジのようにぬめぬめと這い回り、やがて、女自身熱い塊となって淑子の中に入って来たのだった。

おまけ 『SM二元論の主張』パロディ（後編）（前書き）

『SM二元論の主張』<http://ncode.syosetu.com/n5746j/>（作者：りきてつくすさん）のパロディです。

「SMプレイ中にハッスルしすぎて窒息死、成仏できずに下界をさまよう若い女性の幽霊」という設定をお借りしました。

おまけ 『SM二元論の主張』パロディ（後編）

「ただいま戻りました」

「ちよつと淑子さん！ 今何時だと思ってるの」

暗澹あんたんたる気持ちで玄関の扉を開けると、上りがまちに仁王立ちの姑が待ち構えていた。正式名称不明の緩いパンチパーマは、怒りのためか、通常の一、五倍に膨張している。

「あなたねえ、長ネギひとつ買うのにどれだけ時間かければ気がすむの。こんなことなら犬猫にでも頼んだほうが早いんじゃない？ まったく愚図なんだから」

腕組みをして機関銃のようにまくしたてる姑の憤怒の形相に、（んんー、いいっ！ 絵に描いたような鬼姑つぶりじゃないの。あたし俄然やる気が湧いてきちゃったわん）
女がきやつきゃとはしゃぐ。

憑依した女の声は頭蓋骨内にこだまし、そのあまりの異物感に、淑子は思わず髪をかきむしりそうになった。脳の表皮が細かく振動しているような、無数の羽アリが這い回っているような、これまでの人生で経験したことのない感覚に生理的嫌悪をもよおす。

「ひよつとしてあなた、わたし一人に夕飯の支度をさせて自分だけ楽しようって魂胆じゃないでしょうねえ」

姑は教育ママふうの三角眼鏡をくいつと押し上げると、薄紫色のレンズ越しに訝しげな視線を投げた。

「すみません。買い物途中で具合が悪くなってしまって、しばらく近くの公園で休んでいたんです」

「はああ、情けない。そんなことだからいつまでたっても子供がでないのよ。あなたどこが悪いんじゃない？ 一度、病院で診てもらいなさいよ」

大仰に溜め息をつくくと、姑は踵かかとを返し、あえて聞こえるか聞こえないかの音量で、

「まったく、紳一郎もどうしてこんな欠陥女なんて嫁に貰ったのかしらね」

と、吐き捨てた。淑子はその後ろ姿をねめつけ、歯茎から血が噴き出しそうなくらいぎりぎり奥歯を噛み締めた。

現在では不妊の原因は男女同数程度と知られているが、それでもやはり姑という人種はその原因を嫁に押し付けたがるものだ。決して、自分の息子が不能だとは疑わない。また夫も同様で、自分は健康体で問題は妻の側にあると思っっているから、原因の特定がなされず、結果、妻ばかりが辛酸を嘗めることになるのだ。

淑子の場合も、もう長いことセックスレスなので妊娠のしようがないのだが、姑は淑子を石女つしまめと非難する。それどころか、それを周囲に愚痴るのだから堪らない。けれど夫婦生活を姑や他人に把握されるのも気持ちが悪いので、なにを言われてもただ黙って、現状に甘んじるしかなかった。

（ああんっ、屈辱的だわ。欠陥女だなんて普通、思ってもなかなか口に出せないわよね。そんなこと言ったら神経疑われちゃうものね。あんたの姑、ただ者じゃないわね）

女が鼻息荒く言う。恍惚の表情で腰をくねらせている様が目に浮かぶようだ。女は、意気消沈する淑子のことなどどこ吹く風で、

（ねえ、どう？ 興奮しない？ エクスタシー感じちゃったりしない？）

（いえ、まったく。今のやりとりのどこにどう興奮すればいいのか皆目見当もつきません）

（んもっっ、あんたってば不感症？ っっていうか、そんなふうにはなから否定してかかったら感じるものも感じられなくなるわよ。さあ、心を開いて。オープンユアハート！ 自分の身体に正直になりなさい。ほおら、子宮の辺りがぎゅーっつと締め付けられて、体の芯から熱いものが込み上げてこない？）

言われるがまま、淑子は腹部に神経を集中させた。

（……ああ、確かに。はらわたが煮えくり返って熱いものが込み上

げてきました」

「ちよつと淑子さん！ なにばさつとしてるの、早くいらっしやい！ まだ夕飯の支度すんでないのよ」

廊下の曲がり角で姑が怒鳴る。淑子は慌てて姑の後を追った。

しかし、仏間にさしかかったところで淑子の足が止まった。正確には、淑子に取り付いた女がその足を止めさせた。膝はおろか指の関節すら曲げることができない。それはまるで腰から下をギプスで固められてしまったようで、思いどおりにならない焦燥感と麻痺による不安、恐怖。ぶわつと全身に鳥肌が立ち、血の気が引いた。

自分の下半身が自分の意思で動かせなくなつてはじめて、淑子は事の重大さを理解した。そもそも女には、出会ったばかりの淑子のために親身になって動く義理などない。立派なDMに開発してあげる、などと突拍子もないことを言っていたが、実はこうしてこちらを油断させておいて、身体を乗っ取るのが目的だったのだ。少し考えればわかりそうなものなのに、なぜあの時、自分は死に物狂いで抵抗しなかつたのだろう。

きつとこれから身の毛もよだつ恐怖を味わうことになるにちがいない。仏間の前で立ち止まったということは、先祖の霊でも呼び出そうとしているのだろうか。舅は淑子が嫁ぐ前に他界していて面識はないが、この姑と一緒にになったくらいだから姑を上回る根性悪か、逆に尻に敷かれて羊のようにおとなしいか。いずれにせよ最悪の結末しか想像がつかない。

「ひっ」

今度は勝手に、淑子の手が障子に向かって伸びた。やっぱりそうだ、仲間を呼ぶつもりだ。淑子は心の中で必死に、うる覚えの念仏を唱えた。

「申し訳ありません、お義母さま！」

だが予想に反して、淑子の口が、淑子の声で、淑子の意思ではない言葉を発した。突然呼び止められて、姑は何事かと振り返る。淑子もまた、女の真意を測りかねて戸惑っていた。

つつつ、と人差し指が障子の棧さんを撫でたかと思うと、おもむろにその指の腹を姑の方へと向けた。

「こんなにホコリが……。あたくしついたら掃除も満足にできないグズでダメな嫁ですわ。どうぞお義母さま、あたくしのことをうんときつくお叱りになつて。ああ、ぶつてくださつても結構よ！」

（なっ、なに言いだすんですかあなた！）

淑子は狼狽した。姑が目玉を剥いて口をわななかせるのが見えた。（仏間の掃除は姑の日課なんですよ。それをそんなふうに言ったら、まるで私が喧嘩を売ってるみたいじゃないですか）

（あらやだ、そうなの？ せっかくくいびられるチャンスだと思ったのに。っていうか、あんた達なに仲良く家事分担なんかしてんのよ。口は出しても手は出さない、嫁が掃除するそばからゴミを落として歩く、つてのが鬼姑の正しい姿つてもんでしようが）

女は悪びれる様子もなく、さらりと言い放った。

（なに言ってるんですか。そんな非効率的なことをしていたらいつまでたつても掃除が終わらないじゃないですか）

（あんたこそなに言ってるのよ。そもそも嫁いびりなんてもの自体、非生産的な行為なんだから効率なんて関係ないでしょう）

鼻で笑って女は、淑子の指先の埃ほこりをふうつと吹き飛ばした。

姑がまなじりを吊り上げ、えらい剣幕でがなりたてながら引き返して来る。ドスンドスン、と重量級の地響きが猛然と近づく。

「淑子さん！ あなた、わたしの掃除にケチつけるつもり？ 嫁の分際で生意気な口きくんじやないわ……ぶっ」

バシンツ、と大きな音がして、掴みかからんばかりの勢いで向かって来た姑の顔面がぐりんと左に弾かれた。淑子の手が、買い物袋から長ネギを抜き出し、姑の横つ面を殴打したのだ。

もちろん淑子の意思ではない。淑子の肉体はもはや完全に女の傀儡と成り果てていた。意識ははつきりとしているのに、まったくもって身体の制御が利かない。脳と身体の神経が分断され、このまま自分は精神と肉体の狭間に放り出されてしまうのではないかという

底知れぬ恐怖に襲われた。

「ああああいやだわ、お義母さま。ハタキをかけようとしたら急に目の前に飛び出して来るんですもの。危なくってよ」

おほほ、と笑って女は、長ネギの葉先でばたばたと棧の埃を払って見せた。

姑は二、三步後ろによるめくと、焦点の定まらない目を見開いて、酸欠の鯉のように口をぱくぱくとさせていた。衝撃でずり落ちて斜めになった眼鏡のつるに千切れたネギの葉が引っ掛かっている。

辺り一面にネギの刺激臭が充満し、障子や掃き出し窓には飛び散ったネギの残骸がへばり付いていた。窓ガラスに飛んだネギのぬめぬめ部分が、ナメクジが這った跡のような粘液の筋を残しながら、ずると滑り落ちてゆく。狭い廊下は一瞬にして阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。

「……あ、あ、あ、あなた、なんてことするの！ 旦那にもぶたれたことなかったのに」

しばらくして、姑が、真っ赤になった頬を両手で押さえてヒステリックに叫んだ。嫁の豹変にさうとう動揺しているらしく、気の毒なくらい声が裏返っていた。

「あらよかつたじゃない、人生何事も経験っていうでしょう。その歳になって初体験できるなんて幸せなことよ。おめでとう、今日がわたしのビンタ記念日。なーんちゃって」

「よ、よ、淑子さん？ あなた……どうしちゃったの？」

げらげらと哄笑する淑子を、姑は化け物を見るような目で見た。

潤んだ瞳にはありありと恐怖の色が浮かんでいる。

「さてと、掃除もすんだことだし、夕食の支度をしましょうか。ねえ、お義母さま」

女は躁気味に大声を出して、家畜を追い立てるように姑の二の腕や尻をネギでバシバシと叩いた。姑はひいひい、と喉を鳴らし、転がるように台所へと逃げる。女は牧童さながらネギを振り振り、その後を悠然とついで行く。

淑子は卒倒しそうになった。こんなことならいつそ意識ごと乗っ取られていたほうがましだった……。

「なによこれ、鍋じゃないの」

ガスコンロにかけられた土鍋の蓋を開け、女が不満げな声をもらした。

「はい、キムチ鍋です。暑いときには熱いものを食べたほうがいいってテレビでやっていたので……」

台所へ到着するころには、姑はすっかり畏縮して、淑子の顔色を窺うようになっていた。淑子が少し手を動かすだけで、びくつと肩を震わせるほどの怯えようだ。これまで散々、淑子をいびり続けてきた姑の無様な姿を目にして、淑子は複雑な心境になった。

「あんだ、あたしのことバカにしてんの？ そんなの見りゃわかるわよ」

「す、すみません」

姑が首をすくめる。

「まったくなくなっちゃいないわねえ、なんでよりによって鍋なのよ。鍋っていったらあれでしょ、一家団欒の象徴みたいなもんでしょ。肉ばかり食べてないでちゃんと野菜も食べなさい、とかなんとか言いながら和気あいあいと食べるもんでしょ。嫁姑問題が勃発してる家庭の食卓ってものはねえ、もつと殺伐としてなくちゃダメ！」

女は怒声を上げ、スパルタ教師よろしくネギでテーブルを連打した。酷使されたネギはやがて、見るも無残な有様になった。女はそれを鍋に突っ込むと、代わりに、まな板の上に転がっていた菜箸を手に取った。

ペシペシと左手の掌に当てて、そのしなり具合や使い心地を確かめながら、

「いい？ 嫁のおかずだけ量が半分だったり、一品少なかったり、ぱつと見て虐げられてる感が漂ってなきやダメなのよ。そうそう、愛憎料理も忘れちゃなんないわね。たわしをコロッケに見立てたり、

牛革の財布をステーキに見立てたり、そういう独創的な料理も並んでなきや」

菜箸を振り回して熱弁をふるう淑子を前に、姑はどう反応してよいかわからない様子で、はあ、と気の抜けた返事をした。途端、女は姑の脇腹に菜箸を突き立て、ぐりぐりとえぐった。

「……つたく、あんたつてば察しの悪い女ねえ。この話の流れであんたがやるべきことは一つしかないでしょう」

「え？」

「三秒以内に用意しなさい。できなかつたら百叩きの刑！」

姑は顔面蒼白になって流しの下を漁ると、買い置きのためしを探し出し、大慌てで皿に盛ってテーブルに載せた。

「んもう、やればできるじゃない」

女が褒めると、姑は安堵の表情を浮かべた。だがそれも束の間、女は菜箸を振りかぶると、

「でも遅いのよ、このグズ！ 三秒以内つて言ったでしょう！」
罵倒しながら姑の腕やら背中を容赦なく叩いたのだった。

結局、女が当初の目的を忘れて姑いびりを満喫していただけと気付いたのは、夫が帰宅する直前、女が淑子の身体から出て行った後だった。

「話は母さんから聞いたよ」

脱いだ背広をハンガーに掛けながら夫が言う。クローゼットの方を向いているので、ベッドの端に腰掛けた淑子の位置からではその表情を窺うことはできない。だが、低く抑えた声音は怒気を孕んでいるように聞こえた。

「そうですか」

「凄かつたらしいね」

あの姑のことだ、きつといつものようにあることないこと大袈裟に吹き込んだにちがいない。もつとも今回はかりは、誇張してもお釣りがくるくらい酷い事態だったので弁明のしようもないのだが。「すみませんでした」

一言謝罪して、淑子は俯いた。女の幽霊に身体を乗っ取られていた、と正直に話しても、気が触れたと思われるのがおちだ。

「いや、俺のほうこそすまなかつた。君がそこまで思い詰めていたのに気付いてやれなくて」

「……あなた？」

淑子は驚愕のあまり、夫の背中を食い入るように見つめた。この男は本当に自分の夫なのだろうか。いつもなら煩わしそうに生返事をするか、不機嫌になって冷ややかな言葉を浴びせるかするのひよつとして、夫もどこそその幽霊に憑依されているのではないだろうか。

離婚を覚悟していたところに想定外の言葉をかけられ、淑子は疑心暗鬼になった。

「でも君も、我慢してないで言ってくれたらよかつたのに。俺たち夫婦だろ」

振り返った夫は、慈愛に満ちた微笑みを浮かべていた。その笑顔を目にした瞬間、淑子の中に芽生えた疑念は雲散霧消した。

「ええ、そうね。あなたの言うとおりだわ。私たち夫婦なんですもの、自分ひとりで抱え込まずにきちんと相談するべきだったんだわ」

夫の言葉を噛み締めるように、淑子は何度も頷いた。感極まつて涙があふれる。ぼろぼろとこぼれ落ちる大粒の涙とともに、脳裏に渦巻くどす黒いものや、胸中におひ溜まったどろどろしたものや、そういう鬱屈したもの一切合切が洗い流されてゆくような気がした。

夫の手が伸びてきて、淑子の頬を伝う涙を優しく拭う。久しぶりに触れた夫の温もりに淑子はときめいた。初めて求められた夜のことを想い出して胸が高鳴った。肌と肌との接点から熱が波紋を描い

て広がり、全身が火照る。

「俺は君のことを見誤っていたんだな。君は性に関して消極的で、とてもじゃないがアブノーマルな行為を受容できるとは思わなかった。だから俺も自分の性癖を打ち明けることができなかつたし、打ち明けようとも思わなかつた」

「え？」

「こんなことなら、最初から正直に告白しておけばよかったよ。この八年損したな。ははっ。まあ、今までの分もこれから楽しめばいいか」

言つて夫は、にたあ、と好色な笑みを浮かべ、スラックスから革のベルトを抜き取つて淑子の手に握らせた。

「スパンキングしてくれよ、なあ、淑子」

淑子は自分の手の中のベルトを、呆然と見つめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0683j/>

SMの主張

2010年10月8日14時00分発行